

2014 PMA@CES 報告

報告者 日本カメラ博物館 運営委員 市川泰憲

“PMA@CES”という形でPMAショーがラスベガスで開かれるようになって、2014年で3年目である。PMAはPhoto Marketing Association、CESはConsumer Electronics Showの略だが、主催はCEAでConsumer Electronics Associationである。つまりアメリカの写真業界団体の見本市が、電機メーカーの見本市の一環として開かれることになって早くも3年が経過したわけだ。もちろんここに至るまでにはさまざまな経緯があったのだろうが、3年というと一区切りであり、これからはさらに新しい展開があつてもおかしくない。

過去にアメリカの写真業界団体が単独でPMAショーを打てた時代は、カメラ、レンズは当然のこととして、撮影小道具に加え、フィルムや印画紙、アルバムなど幅広い商品展示があったわけだが、まずカメラがデジタル化され家電製品の中に入り、フィルムや感材処理剤、処理機器の展示が気づいたら忘れ去られ、その後アルバムの代わりに登場したフォトフレームが早くも見えなくなり、いまでは4Kという高解像度の液晶ディスプレーで写真（映像）を見ようと提案されているのが、大きな流れだ。つまり、写真システムがケミカルの時代から明らかにデジタルの時代に移行した結果なのだろう。

■ PMA 総会と展示会

とはいってもPMAの展示と催事は例年通り行われており、“PMA@CES”的初日1月7日は、早朝7：30には関係者の朝食会に始まり、PMA総会とオープニングセレモニーとしてテープカットが行われる。食事会は、皆それぞれ知り合い同士が軽く挨拶する程度で、食事に入り、最後に簡単な会長の挨拶に引き続き、次年度からの新会長が軽く挨拶するといった具合で、きわめてリラックスしたムードの中に進行する。数年前までは、出席者全員が1人ずつ起立して自己紹介することから始まったようだが、私が出席するようになってからのこの2年間は行われていない。

食事会はLVH、かつてはラスベガス・ヒルトンであったのが、いまはラスベガス・ホテルと改名され

たホテルのクラウンルームで行われる。食事をそこそこに終えると、Shimmer Cabaret Theatreというホールへ移動する。

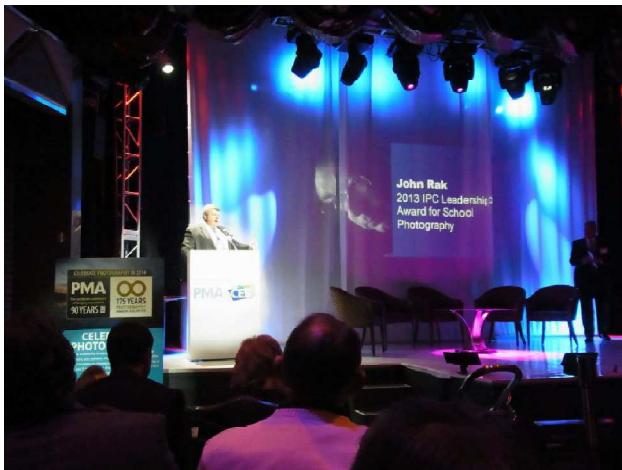
こちらでPMA総会が開かれるが、昨年は来場者全員が、ステージに上がりテープカットをして記念写真を撮影した。今年は会場に入り少し経つとPMA役員関係者だけが壇上に登り、あつという間にテープカットと記念写真の撮影を済ませてしまった。昨年、私は壇上にいたのでテープカットの記念写真を撮影できなかったが、今年は壇上にいな



PMA早朝食事会にて。右からPMA会長のAlen Showalter氏、新会長のBill Ekulund氏、Jim Esp専務理事



ステージの上でオープニングのテープカットを行い記念写真におさまるPMAの役員たち。昨年は参加者全員でテープカットと記念写真を撮ったが、今年は一部の役員だけとなった



学校写真への功労で、IPC (International Photographic Council、NGO of the United Nations) の賞を得た John Rak 氏



PMAへの功労で表彰された富士フィルムノースアメリカのManny Almeida氏の代理で挨拶する富士フィルムスタッフ



メンバーによるパネルディスカッション

かつたので、セレモニーとしてのテープカットを写真に収めることができた。

テープカットの後は恒例として総会が行われ、功績があったメンバーと関係者の表彰が行われ、会長の Alen Showalter 氏に変わり新会長として Bill Ekulund 氏が選任された。総会の後は、功労者の表彰、さらにはメンバーによる座談会なども開かれた。

いよいよ、10:00 近くになると総会を終え、皆で歩いてLVHにあるPMAコーナーに歩いて行き、自然解散という感じでセレモニーは終了となる。

まずはこの順序にしたがって、展示会場はPMAコーナーを最初に見て歩く。一步、足を踏み入れて驚いたのは、過去2年間PMAコーナーで最大規模を誇っていた日本の現像・プリンター機器メーカーであるノーリツ鋼機が見当たらない。さらに昨年はオンドマンド印刷機を展示していたコニカミノルタも見当たらない。

わずかに日本関連の企業としては、サンパックストロボの『トーカド・アメリカ』が大きくブースを出しているぐらいで、あとはJPEAのブースが目につく程度だ。こちらも例年だと、会員会社が製品



LVH（ラス・ベガス・ホテル）のPMA@CESコーナー入り口

を持ち寄って展示をしていたが、今年は大内専務理事が1人でブースに詰めていた。

PMAコーナーには、ドイツ、韓国、中国といった国の中企業がそれぞれの国のコーナー下にブースを出しているのが目につく。面積的には、ドイツ<韓国<中国といった順に大きなスペースというか、多くの企業が出展している。日本は、CES全体として見ると、大手家電、自動車、カメラなど大企業は出展しているが、中小企業は少ない。

そのような中で、唯一PMAコーナーに日本の光学フィルターメーカーを見つけた。“JAPAN TASTE”というブランドで、アメリカ国内の代理店が連絡先を出しているが、ブースにいた2人の日本人女性に聞くところによれば、長野県の安曇野にある会社だということは教えてくれたが、具体的な企業名は語られなかった。出展は初めてだという。最近はケンコーもマルミも出でていないというような話をしたら、逆にどこに出せばいいのかと聞かれた状態で、本当に初の海外進出のようだ。

この光学フィルター分野、中国企業の進出も目につき、“Haida”というようなブランドをつけ、いかにも日本企業のような語感で、ブースを出し立



幅広い写真機材を扱うトーカド・アメリカのブース



写真映像経営者協会（JPEA）の大内専務理事



ドイツコーナーは、ローデンシュトック、シュナイダー、メッツ、ゴッセンなど旧知の機材メーカーが展示している



初の国外展示だというJapan Tasteというブランドのフィルターメーカー



中国企業の集うゾーン



韓国企業の集うゾーン

派なカタログを配布していた。商品としては、どのような品質なのか興味ある部分だ。

さて、このPMAサイトで、今回最も大きなコーナーを占めていたのは“DJI”という無線操縦の電動ヘリコプターというか飛行物体を作るアメリカの会社だ。もちろん単に飛ばすだけでなく、スタビライザーが付いており、ソニーNEXやパナソニックのGH3、ブラックマジックなどのカメラを取り付けて動画撮影を空中で自在に行おうというのだ。無

線操縦に使う電波帯は国によってそれぞれ異なるはずだが、このあたりをクリアできれば、日本を含めてホビー、業務、セキュリティー、軍事までと用途は広い。

そしてこの“DJI”的機器を扱っているのが“B&H”というのがおもしろい。B&Hは日本の銀塩感材ユーザーならよくご存じの、アメリカの通販業者だが、昨年までは各種フィルムや印画紙を横幅3mぐらいのスペースに出展していたのが、今年は一気に無



PMA サイトで、大きなコーナーを占めていたのはアメリカの DJI という無線操縦の電動ヘリコプターの会社だ



搭載可能なカメラは GoPro のようなウェラブルカメラから一眼レフまでとかなり幅広い。撮影画像は動画が多く、すでにこのような機器を使ったテレビ番組も日常的に見るようにになった

線操縦の電動ヘリコプターを展示するようになったのが、時代の変化を感じさせる。

PMA コーナーで主に見るべきところは、大体この範囲である。この後は大手のカメラ関連企業を見ていくことにしたが、その出展はほとんどLVCC（ラス・ベガス・コンベンション・センター）のセントラルホールに集中しているので、残りはLVCCを中心見て歩いた。

■ CES コーナーでの展示

CES 会場で、Audio と Video の関係はコンベンションセンターのセントラルホールがメインだ。こちらに入ると、以前は、まず目に付くのはマイクロソフトでありインテルだったわけで、いかにも CES を象徴するコーナーであったと記憶していたが、今年もインテルはいつも通り出展しているが、マイクロソフトは昨年から参加しておらず、かつてのマイクロソフトの場所には Hisense という中国のディスプレーメーカーが出展している。場所としては 1 等地だが、世代交代の時期なのだろうか。



LVCC (Las Vegas Convention Center) 入り口に設けられた CES のモニュメントのような看板



ラスベガスコンベンションセンターのサウス・セントラル・ノースホールを結ぶ建物内の通路



ラスベガスコンベンションセンターのセントラルホール建物外の通路

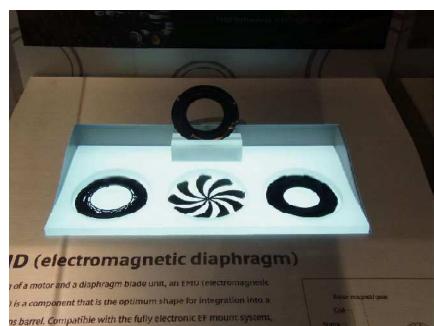
同じようにセントラルホールメインの入り口には前年同様に LG 電子が陣取っており、昨年と同じように大型スクリーンによる 3D 映像で観客を迎えて入っている。この LG 電子か Hisense を通り越さないと奥には進めなく、ここを通り過ぎると、入り口から近い順に、パナソニック、シグマ、カシオ、シャープ、東芝、サムスン、富士フィルム、ビビターラ / サカール、キヤノン、ポラロイド、ソニー、ニコン、リコーイメージングなどが出展しており、



完全電子マウントとして1987年にスタートしたEFレンズが9000万本生産されたというロゴマークにはさまれて交換レンズを観けるようにステージがセットされている



一見してソニーのブースのように見えるが、左はキヤノンのブースなのである。多くの観客を集めてプロのトークショーというのと同じだ



今年のキヤノンのブースは例年に比べるとかなりおとなしい感じで、交換レンズのカットモデルや、レンズ清掃の実演、交換レンズの絞り羽根の動作説明、硝材としての螢石結晶などと、全体的に見せ方が地味な感じがするのは拭えない



Xシリーズデジタルカメラを中心に富士フイルムのデジタルカメラの高級化路線は急ピッチに進んでいる



銀塩感材が健在。韓国のドラマに登場してから人気急上昇「チエキ」のインスタントフィルムを使い、スマートフォンで撮影した画像をワイヤレスで送り、約16秒でプリントできる「instax SHARE Smartphone Printer SP-1」



日本企業以外でデジタルカメラを製造・展示するのは事実上韓国のサムスンだけである。こちらも日本と同様にコンパクトカメラには期待できないという。左の一眼レフ型ミラーレス機の「NX30」はファインダーアイピースを引き出すことができ、アングルファインダーとして使える。右はアンドロイド4.3をOSとした光学21倍ズーム搭載の「ギャラクシーカメラ2」



intelはさまざまな分野での応用例を見せていましたが、ここでは車の中の制御装置に使われていることを示していました



パナソニックは、高解像4Kディスプレーを前面にして展示。撮影機としてルミックスの4Kモデルも展示了



シグマのブースは従来から一貫して白を基調とした清楚な作りが売りだ。今年は特約店オーナーから提供されたというレクサスを前にモデルを配し、華やかさが増した

写真映像関係をメインに見ようと考えるならこのセントラルホールとプラスアルファを見るだけで事足りることになる。

ここゾーンに入ってまず驚いたのは、カシオにデジタルカメラの展示がないことだ。確かにコンパクトカメラの不調が伝えられる昨今であるが、展示をしないというのは、かなり思い切ったこと



セントラルホールへ足を踏み入れると中国のディスプレーメーカーHisenseがまず目につく。隣はintel



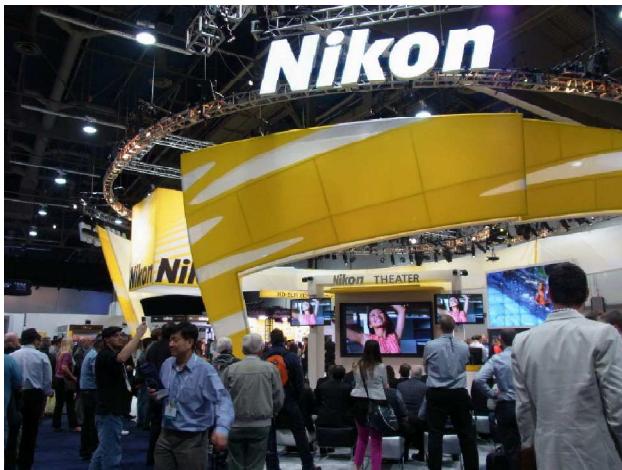
EVF内蔵のルミックスGX7に装着されているのは、Leica Nocticron 42.5mmF1.2 PowerOIS。M4/3規格だから、35mm判換算85mmの準望遠大口径となるが、名称はライカのノクチルックスとズミクロンの組み合わせだという



シグマのこの時期の新製品は、②Contemporaryラインの「18~200mmF3.5-6.3 MACRO OS HSM」と③高画質でレンズマウント交換可能なArtラインの「50mmF1.4DG HSM」

だ。カメラのないカシオのコーナーはウォッチのGショックがメインに展示されているが、カメラがないと集客はいま1つといったところで、アンケートに答えると、電卓やGショックをプレゼントというので人目を引いていた。

もっとも、出展している企業においても、この時期は特に目立った新製品があるわけでもなく、全



CES会場の入り口では、フォトキナと同様に黄色いニコンのロゴ入り袋をどーんと置き、自由に持って行って下さいとばかりに配布している。ニコンブースのにぎわいもなかなかで、いまやカメラはCESにとって重要なアイテムとなったことが、よくわかる。右のカットは、一眼レフカメラを360°多數配して3Dデータをとるためのものなのだろうか



左は会場で仕様などすべてが未公開のまま外観のみ現物展示されたニコンD4s、④CES会期直前に発表となったニコンD3300。APS-Cサイズ、2416万画素撮像素子を採用。これでニコンのAPS-C判一眼レフはすべて光学ローパスフィルターレスとなった。標準レンズは沈胴式。右はニッコールレンズの総生産数が8000万本になったという記念ディスプレー



総合映像機器メーカーとしてのソニーにとってもCESのようなコンシューマー向けの展示会においては、デジタルカメラの分野は重要な事業である。左は、企業イメージを伝える映像ゾーン、右は従来からのα一眼レフカメラ時代からの展示方法を踏襲しているが、明らかにその内容は、“一眼レフ”から“ミラーレス一眼”へと変化している



従来からのソニーNEXシリーズは、今後αシリーズとなり、従来からの一眼レフのαシリーズはどのようになるのだろうか。④は、レンズ交換式でフルサイズ3600万画素撮像素子搭載の「α7R」、⑤はレンズ非交換式で2020万画素裏面照射型1インチ撮像素子を採用した「RX10」。α7Rはバリオテッサー、RX10はバリオゾナーとカール・ツァイスレンズを搭載し、高級感を出している。⑥レンズスタイルカメラDSC-QX100/QX10をスマートフォンから離して使う方法を提案した



⑤リコーの名称が前面に出て、ペンタックスの名称はカメラの機種名で、看板からはPENTAXの文字は消えてしまった。展示のメインはペンタックス以来のカラーボディである。⑥リコー時代の製品としては“GR”がわずか1機種残るのみ



昨年突如として登場したポラロイド社は、Sakar社の1ブランド商品だが、昨年に引き続き単独でブースを持つた。その面積は富士フィルムより大きく、Polaroid/Vivitar/Sakarグループを合わせると、ニコンやキヤノンの面積よりも広い



Polaroid の新製品は、⑤アンドロイドOSのZink プリンター内蔵の「Socialmatic」カメラ、4.5in タッチスクリーン式、⑥昨年に引き続くレンズ内撮像素子のレンズ交換式ミラーレス一眼、⑦カメラとスマートフォンの連係をうたう



Sakar社はポラロイド、ビビター、ハローキティなど各種のブランドの権利を持つが、昨年にはコダックブランドを入手



イーストマン・コダック社は、昨年日本では、コダックアラリスジャパンとなつたが、CESではセントラルホール階段脇にプリントコーナーを設置するだけにとどまつた



カシオは、デジタルカメラは出品せず、Watch の G ショックをメインに展示了。昨今のコンパクトデジタルカメラの不調は、今後は各社徐々に影響が出てくるのだろうか

体的にはカメラ関係は低調なのか、それとも 1か月後の 2月 13日～16日に控えた日本での「CP + 2014」までお預けといったところなのだろうか。

以下に、各社のブース並びに新製品のうち目に付いたものを写真を中心に記してみる。

■ CES の周辺から

実は CES 開催前日の 6 日にマスコミとアナリストに向けて「Digital Experience」という展示会が am7:00～pm10:30まで、pepcom というイベント会社 (www.pepcom.com) の主催で、CES 会場近隣のミラージ・ホテルで開かれるのが恒例だ。

このデジタル・エクスペリエンスには、150 社以上が参加しているとのことだが、カメラ関係では、

キヤノン、ニコン、リコー、ポラロイド（サカル）、サムスンなどがわりとこじんまりと展示しており、CES には展示スペースをもたないオリンパスも参加している。まずは、前日にダイジェスト的に見ることができるので都合がよい。

入場にあたっては、2013 年の受付は長蛇の列だったが、今年はすんなりと入ることができた。これは開催の初日が、例年ない大型寒波の襲来でニューヨーク、ワシントン DC からの航空便がキャンセルされたという影響を受けたのだという。

■ 2015に向けて

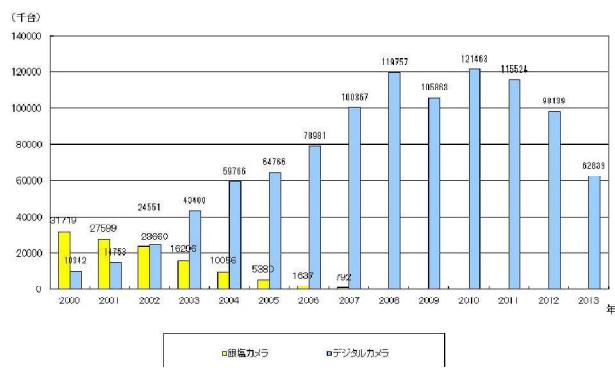
以上、写真映像関連の企業を概観してみたが、PMA@CES となって、静かに PMA グループというか、



《CES 開催前夜のデジタル・エクスペリエンスに出展したカメラ関係各社。各社ともこの程度のスペースで足りている》



カシオのWatchであるGショックとスマートフォンの連絡。スマートフォン側から、Gショックへ音楽のコントロール、時計のセット、警告を出すなどができる。これは最新デジタルカメラの付加機能と大変よく似ている



2000年からのカメラの総出荷。2002年でフィルムカメラからデジタルカメラの生産が逆転し、以後リーマンショック、3・11、タイでの洪水などの影響もあったが、成長は復帰しないまま、低下してきている（CIPA統計データより）

純写真企業は静かに変化しているのを感じる。

昨年まではPMAコーナーに大きなブースを出していた、ノーリツ鋼機やコニカミノルタ、CESコーナーではトキナー・HOYA・ケンコー・スリックの製品を扱うTHKPhoto Products Inc. などが姿を消していたことだ。ケンコートキナーは同時期、インドで行われたムンバイ・コンシュマーエレクトリックイメージングフェアに出展している（タムロンも同様）。また、筆者が聞いた範囲では、2014年には日本人スタッフを送り込んでいた、キヤノン、リコー、トーカドなどを初めとして、多くの日本企業が現地法人スタッフにその出展・運営を任せているというのが現状のようだ。

PMA@CESとしての開催は2014年で3回目である。PMAとしては単独開催が本来であろうが、2015年もCESとの共催で1月6日～9日まで開催すると発表された。また出展場所は、LVHではなくてコンベンションセンターのサウスホールだという。

結果としてカメラメーカーの隣にきての開催となるが、実際どれだけ参加企業を集め、集客できる



上はLGの、下はサムスンのスマートフォンである。いずれも最新のモデルで、そのカーブの仕方がお尻に合わせてあるというのだが、新機能へのアイディアはそこまで到達しているわけだ。昨今のデジタルカメラはスマートフォンのカメラ機能に押されて不調というが、そのスマートフォンも機能的には行き着いており、ある面デジタルカメラと同じような進化の構造がある

かがその時の課題となるだろう。

CESを取りまとめるCEA(Consumer Electronics Association)は、2014年のCESは1月7日から10日の4日間で200平方フィートの展示会場面積、3,200社の出展を得て、過去最高の規模となったとファイナルレポートを出している。また、PMAは写真業界団体であるので、表に見えない部分で、ワークショップやセミナーを開いているが、単に写真機材ショーとして見るのではなく、あくまでも年次総会的な見方が必要なのだろう。

昨今のデジタルカメラは、スマートフォンのカメラ機能の影響を受けて、特にコンパクトカメラは退潮が著しいとされている。しかしどうなのだろうか。2013年末までのカメラ映像機器工業会(CIPA)の統計によれば、レンズ交換式カメラにも成長の鈍化が見られる。これらは単にスマートフォンに押されたのではなく、デジタルカメラそのものの技術的発展が、フィルムカメラ時代の技術進歩の上に乗っかり、ある意味一気に成熟してしまった結果ではないかと筆者は考えている。

近年、デジタルカメラはある時点まで、画素数を増やすことなどで新規需要を開拓してきたが、それらもいまや頂点に達した感があり、その部分を超えた新しい技術開発が何なのか、いましっかりと根底から見直す時期にあると思う。